

学習意欲を高めるための8条件

8 Conditions for Motivated Learning

水田 聖一*

Seiichi Mizuta

本研究は、最近のアメリカの教育研究の中から、生徒に動機づけを与えるためには何が必要か、また何を避けなければならないかを調査した研究を土台に、八つの必要な条件を論じたものである。これらの諸条件は、学校の内外での学習に関して、積極的、意欲的な態度を示すよう働きかけるものである。これらは最新の認知心理学の研究や脳科学の研究とも一致している。

キーワード：興味・関心、意欲、動機づけ

解題

アメリカで最もよく読まれている教育雑誌 *Phi Delta Kappan* 誌が、2014年5月号で学習意欲の低下に関する警鐘記事の特集した。その中には、「生徒の無関心：思ったより深刻」や「学習意欲を低下させる六つの間違い」、「生徒を学習に参加させるための基礎」、「脳科学が明らかにした倦怠障害」、「生徒の毎日の生活に合わせた個別学習」などの論考がある。本研究ではその中の論考から、「学習意欲を高める8条件」を中心に概略を考察し、その後に翻訳論文を紹介する。

学習意欲を高める8条件とは、以下の八つである。

1. 情緒を安定させる：学校は私を受け入れてくれるという感覚
2. 生徒の自己発展を目的とし、教科の内在的価値を示す
3. 生徒の活動を取り入れる
4. 教師と生徒との相互信頼
5. 教えるというより、支援・指導する：コーチング
6. 学んだ事柄を使ってみる
7. 振り返りを行う
8. 次に行うべきことを計画する

* 流通科学大学 商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

第1の条件「情緒を安定させる」について

学校は一定の教育内容を教えることが任務なので、「情緒の安定」は、生徒がより良く習得するための条件とは無関係のように思えるかもしれない。しかし、教師や学校が、生徒と親和的な関係を築き、学校内の人間的・社会的状況の中で、自らを活かしていく体験を積みせたり、望ましい社会的状況を作り出したりできるように配慮することで、生徒の自己実現能力を育てることが可能になる。これらのことは、一定の教育内容を学ばせるためには、欠かすことのできない要素である。諺に「坊主憎けりや袈裟まで憎い」と言うように、最悪の場合「教師(または学校)憎けりや教科まで憎い」ということになりかねない。古来より「感性から理性へ」と言われるが、憎しみ、不安、孤独などの情動が、理性的判断を妨げ、教科内容を学ぶことを不可能にする。それゆえ、子どもたち一人ひとりに、温かい微笑のまなざしをかけ、当てにし、期待し、気持ちを理解することによって、生徒に「居場所」を与える必要がある。

第2の条件「生徒の自己発展を目的とし、教科の内在的価値を示す」について

吉本均は、ドイツ・チュービンゲン学派のギール(K. Giel)という教育学者に学びながら、教えるとは「指さす(zeigen)こと」であるとし、教えるという指さし行為の特質を二点挙げている¹⁾。

- ① 対象を直接につかんで与えるのではない。それは、距離を持ってさし示す、意味的な媒介行為である。
- ② 指さされる方向をめざして、子どもたちは接近する。彼ら自身が自らで歩みより、ものや人と出会い、発見していく。

教師は、発問を通して、教育内容・課題を際立たせたり、具体性と意味のある教材や発問によって、呼びかけたり、問いかけたりすることで、「自ら学ぶ関心・意欲・態度」を呼び起こすことが決定的に重要だ。発問などを通して、教科の内在的価値を指さすことが、生徒の自己発展へと繋がる。

第3の条件「生徒の活動を取り入れる」について

長野県の県立高校の授業をみた佐藤学は、次のような感想を書いた。「鷺見先生の授業は『裁縫』であったが、題材をクッション、アームレスト、スリッパ、ぬいぐるみから選ばせ、創造性を発揮してデザインに取り組みたい生徒は、自分のデザインによる製作に挑戦していた。小声でアイデアを交換し励まし合いながら作業している男女の生徒たちは、まるで『癒やし』のように針仕事に専念している。なかでも印象的だったのは、教室の仲間にも授業にもうまく溶け込めなかった佳子(仮名)である。彼女は、クマのぬいぐるみの製作ができるようになると俄然意欲を燃やし、

自分自身で苦勞してデザインして素敵な作品を完成させた。その全工程を支えた教室の仲間たちのさりげない優しさもすばらしい」²。

学びに困難を抱えている生徒に対して、学びのレベルを下げないで授業を行うことは、学びの権利を保障するだけでなく、生徒の尊厳を守る上でも重要だが、授業に生徒の活動を取り入れるならば、難しい課題であっても、生徒は自らの力で達成することが可能になる。

第4の条件「教師と生徒との相互信頼」について

生徒が「その気になる」、「やる気になる」のは、教師からの熱いまなざしがかかけられ、当てにされ、期待されていると感じるときだ。そのような関係を作り出していくことが、学級づくりの本質だろう。

「契約社会になじんでしまった私たちは、とかく、こちらの要請に対して応えてくれること、あるいはこちらの要請に応える能力があることを基準に、人に対する尊厳や信頼をはかりがちである」³と佐藤学は言う。しかし、このような見方からは、わずかの「できること」を基盤に、「できないこと」に挑んでいる生徒に対する尊敬や信頼は生まれようがない。「できる・できない」という眼鏡をはずせば、「一人ひとりの子どもが固有の学びに挑戦し、誰とも比較できない個性的な経験を創造的に生み出している姿に出会うことができる。その個性的な学び育つ過程に、私たちは一人ひとりの子どもの尊厳を見出し、信頼を寄せることができる。何かの応答の結果に対する信頼ではなく、その子独自の学びの過程に対する信頼である。子どもたちの尊厳は(そして大人の尊厳も)、能力にあふれていることにはではなく、無能で無力な弱い存在でありながら、独自の道筋を探索しながら絶えず学び育っていることにある」⁴からだ。教師の生徒への信頼は、生徒からの信頼となって返ってくる。

第5の条件「コーチング」について

教育目標には、知識の習得、知的技能の育成、観念や価値についての幅広い理解力という三つの柱がある。知的技能は、知識の習得とは違い、説明的・教授的な方法では育成できない。それは体育技能を教える際のコーチングと似ているところがある。「コーチは学習者ができるようになり、正しい動作を繰り返し行え、正確に順序良く動作を組み合わせられるように援助することによって訓練する。また、間違ったパフォーマンスを何度も繰り返して修正し、ある程度の完成に達するまでそれを繰り返すよう力説する」⁵。

読み方、書き方、話し方、聞き方の技能が獲得されるのは、このような方法によってであり、数学的、科学的操作技能、批判的思考、判断力、識別力が獲得されるのも、ただコーチングによ

る。

第6の条件「学んだことを使う」について

近代教育学の父と呼ばれるヨハン・アモス・コメニウスは、『大教授学』⁶のなかで、「他人に教える者は、自らを教える」という古来からの慣用句を引用し、「他人に教える人は、自分が汲みとったものを反復によって踏み固めるばかりでなく、さらに深く事物の中に踏み込んでいくきっかけをつかむことになる」⁷と述べた。

最近の心理学研究でも、「競争的環境」と「協同的環境」のどちらが生産性が高いかに関する調査で、「競争的環境」の個人学習よりも「協同的環境」のグループ学習のほうが、圧倒的に生産性が高いことを立証しているという⁸。

学習において躓いた子どもが、「ねえ、ここどうするの」という仲間への問いかけから出発し、その問いを相互に共有し探求しあう互恵的な学びは、個人では達成できないような、より高度でより豊かな学びを実現する。

第7の条件「振り返り」について

「振り返りとは、私たちがしようと試みることと、結果として生じることとの間の関係を洞察・識別することである」⁹と、ジョン・デューイは『民主主義と教育』の中で語っている。振り返りがなければ、意味ある経験はできない。逆に、私たちが行う活動と、結果として起こることとの関連が発見されると、これまで試行錯誤で行ってきた経験の中での思考が、はっきりと示されるようになり、このような経験を積み重ねていくことによって、内省的な思考は習慣となり、型となる。

デューイは、「学校において、良い思考の習慣を育成することが重要であることを、理論上疑うものは誰もいない」と述べたすぐ後で、「しかし、実践においては理論上ほど承認されていない」¹⁰と述べている。たとえ、興味を抱かせるような活動を準備し、従事させたとしても、また活動を展開するのに必要な資料を自由に使えるようにさせたとしても、振り返りがなければ、思考は観念へと発展せず、生徒にとっても意味をもたない。

振り返りを行ってこそ、過程段階における思考が適切であったと判断でき、知的に構成できたことへの喜びがある。ある意味では、それは発見の喜び、創造の喜びだ。さらに、そのような体験を積み重ねていく機会を与えることが学校・教師の役割である。

第8の条件「次に行うべきことを計画する」について

学習内容の全体像・見取り図を、まず生徒に示すことは、教授における重要な原理の一つだ。そうすれば、生徒は入門の第一歩から学習の目的を知り、途中の段階においては、相互の関連を正しく展望することができる。それゆえ、ある段階が終われば、次に行うべきことを計画することが必要になる。生徒の学業面での成功には、計画が欠かせない。その点でも、生徒がもつ、知識、技能、意欲をどのように活かせるかを援助するのは、教師の仕事である。

次に、同じテーマを扱う、キャスリーン・クッシュマンの「動機づけられた学習のための8条件」¹¹を紹介する。

動機づけられた学習のための8条件

キャスリーン・クッシュマン

生徒が学用品のバックパックのようにやる気（または無関心）をもって登校すると、時には考えたくなるものだ。しかし、若者に耳を傾けると、彼らの目と心を点灯させるものについて何か別のものがあることに気づく。

過去数年にわたって、私は非営利法人 WKCD (What Kids Can Do :子どもたちに何ができるか) で、生徒の動機づけと習得についての研究を行った。全国各地の多様な幾百人もの青年とのインタビューを通して、彼らが予習したり、学習課題に熱心に取り組んだりさせるものは何かを探った。彼らの答えは八つの不可欠な条件に要約することができる。それは、動機づけと習得に関する学習科学が教えるものと密接に結びついている。

例えば、認知心理学における価値予測の研究は、人がある課題を重視し、道理にかなった努力を行えば成功できると思えるとき、動機づけが高まると教えている (Center for Mental Health in Schools at UCLA, 2002, Reengaging students in learning at school. *Addressing Barriers to Learning*, 7(1), 6.)。これらの要因は、若い学習者が私に語ったことと関係している。私たちはこの原則を「動機づけ方程式」(価値×期待値=動機づけ)と呼ぶことにする。

神経科学もまた、生徒が学ぶのに最も助けになる条件について私たちが語る事柄と一致する。例えば、神経科学の研究によると、私たちが仕事を振りかえるとき、私たちの脳は過去の手順とその結果から「事例ベース」を構築することを示す。そしてこれらの接続は、私たちが習得に向けた次のステップを計画するのに役立つ、という。

以下に述べる若者が学校での経験を説明しているように、彼らは私たちが「GR8: 学生が学習に従事したいと思う8条件」と呼ぶ、シンプルだが強力なリストに関する研究が有効であることを

示している。彼らの話や意見を通して、生徒の声に親身になって耳を傾けることが、一人ひとりの教師が行うべきすべての重要な作業を明らかにする。つまり、生徒をやりがいのある課題に引き入れ、障害に面しても辛抱強く努力し続けるように仕向けることだ。

条件1：大丈夫、心配しなくてもいい

「僕が教室に入った時から、僕の一日はうまく行かなかったんだ」と、15歳のスティーブンは語った。「あれもこれもうまく行かず、…興奮したり、怒ったり、落ち込んだりで。多分みんな僕には話しかけなかったんだ。もしうまくいくと言ってもらえなかったなら、成績は上がらなかったと思う」。

スティーブンの言うことは真実だ。学校であろうがそれ以外の場所であろうが、生徒が経験するストレスは、学習よりも脳内の生物学的な優先権を求める。恐怖、恥、空腹、極度の疲労、喪失感、気晴らしなどの基本的感覚が道を遮るとき、学習は非常に困難になる。

教師は子どもたちが安心でき、世話されていると感じる環境を作り出すとき、動機づけに不可欠な基盤を築いていることになる。例えば、学校の朝食は、学習者の身体的健康を向上させる。しかし、彼らの情緒面での安全性は、多くの場合、答えが正しいかどうかを重視する教室ではなく、探求することに焦点を当てるような教室文化で得られる。17歳のラショーンは、「全然得意じゃない科目があります」と認める。だが彼は自分の努力を支援するよう教師に頼る。「先生は僕と一緒にやってくれる。僕は先生の助けを得て、すっかり理解することができると思う」。

若者と大人との間で尊敬の絆を構築するような学校構造は、生徒が自分の情緒的バランスを維持するのに役立つ。14歳の時、ジェイソンは、バスに乗って荒っぽい人々が住む地域へ帰宅することを怖がっていた。しかし、学校の中では、彼を担当するグループが、彼の信頼できる仲間集団になった。「僕が行くことができる場所はどこも安全だ」と彼は語った。「自分自身を制限する必要なんかないんだ。もう心配しなくていいんだ」。

条件2：それは重要だ

私たち大人のほとんどと同じように、若者も、自分たちにとって重要でない事柄には関わりたくない。興味の火を点すためには、若者たちが大切にしている側面にしばしば注意を向ける必要がある。交通手段がニューヨーク市の地下鉄しかないアマンダは、将来の自動車の燃料問題という理科の授業のプロジェクトに、最初は全く関心がなかった。しかし、魅力的な紹介ビデオを見て、彼女は、「私たちが使うすべてのものが石油を使用しているし、将来それがなくなってしまうのではないか」と思った。自分たちの後の世代がどうなっていくのかを考えたとき、アマンダは

詳しく調べ始めた。やがて彼女は、父親が「お父さんがこれから話そうとしていることを、お前はもうすでに分かっているなんて、とちよっとショックを受けた様子だった」のを楽しそうに思い出した。

教科内容がそれほど魅力的でない場合であっても、生徒はそれが好奇心をそそるパズルや、公正に関する問題として提示された場合には喜んで従事することがある。また、彼らは作業をする際に、選択肢が多ければ多いほど、より多くの価値を見だし易い。多くの生徒は、教師が熱意を示しているという理由だけで、喜んで参加しようとする場合もある。しかし、その課題が偽物のように感じたり、恩着せがましく感じたりするなら、彼らはすぐに背を向けてしまうだろう。

何よりも青年期は、彼らの世界で重要であると思えるようなアイデンティティを求めている。「物事の背後にある理論」の世界へ入ることを夢見ているケネスは、数学のことを、「人生で役立つものであり、役立つことをし、役立つことを成し遂げる方法だ」と思っている。スティーブンは、英語の授業で出た「私とは」という100行の詩を書くのに5時間を費やした。「これはみんなが僕についてまさに知って欲しいものなんだ」と彼は語った。

条件3：それは活動的である

「それは世界で最も困難な状況だった」とマイケカリーは、彼が友人とモデルハウスを建てるといふ幾何の課題を説明したとき、晴れやかに述べた。「僕たちは、得意な部分がそれぞれ違っていたので、細かなところで互いに協力したんだ」と彼は語った。「すごいことだった」。

実践的で、協力的で、楽しい課題であれば、なかなか気の進まない生徒も関わらせることができる。さらに、活動的な作業は、教科領域内の重要概念を理解させることもできるし、永続的な印象を残すこともできる。社会科の先生が、世界各地に住む他の16歳の若者たちとスカイプで話をさせたとき、マランダは11年生の人類学に引き込まれた。異なる文化が偏見を獲得することを強調するために、このクラスは飲茶レストランを訪問した。「鶏の足が出たのよ」とマランダは興味半分、怖さ半分で語った。「私たちに向かって突き出ていたものがあったんだけど、その主なものが鶏の足だったの」。

生徒たちはしばしば、彼らがフィールド活動、インターンシップ、実験、ビデオまたはその他のメディアのプロジェクトで獲得した知識について満足げに話をした。アマンダは、彼女の街の歴史協会への訪問を、資料の宝探し(トレジャー・ハンティング)と設定し、「私は教室以外の場所で、現実に歴史について学んでいるのよ。これは私が本当にやってみたいことだったし、もっと学びたいことだわ」、と語った。

条件4： 私たちを伸ばしてくれるものである

小学校では「僕はほとんどしゃべらなかつた」、とグリフィンは振り返る。しかし彼の教師は6年生から、定期的に自信を開発する機会を彼に与え続け、14歳の時にやっと自信を得ることができた。他の多くの生徒もまた、アリエルが言うような「自分の限界をもっと広げるようにいつも励ましてくれた先生」のことについて語っている。「先生は、現在の僕を、物事をなし得る者として見てくれて、そのおかげで僕は大きくなれたんだ」。

テンポの速いビデオゲームと同様に、生徒は「難しいけれど、できる」と感じる課題には興奮をもって取り組む。彼らは気後れや恐怖感についてさえ語ったが、成長できる地点まで少しずつ近づけてくれる教師を信頼した。例えば、カーラは自宅ではいつもスペイン語を話す、第十学年のスペイン語のクラスでは、上手に読んだり書いたりできなかつた。彼女自身と彼女の家族を失望させないように、「私は初心者段階に戻って行かなければならなかつた」と彼女は語った。そうすると言って聞かなかつた彼女を、受け入れてくれた教師を今も信頼している。

神経科学者は、「より高い技能を身につけようと努力し、その結果得られた満足感は、さらに伸びようとする学習者の意欲を構築する」ことを発見した。「完全に自分を出し切って挑戦しているとき、僕が今までやってきたことを繰り返しているだけなんだ」と11年生のケネスは述べている。「僕はそれをとてもうまくやりとげたんだ」。

条件5： 私にはコーチがいる

誰も練習なしでは習熟は達成できないが、効果的な練習は芸術であると同時に科学的でもある。生徒たちは、教師が教室内で、新しい技能を提示し、支援と励ましを提供し、過ちから学ぶことを助けてくれるなど、教師がコーチのように行動したときに最もやる気を感じたと述べた。

レイシャウンは、音楽の授業をしてくれる教師について、「先生は僕がどこで限界に達するかを知っているのさ」と述べている。「僕は、『もうこれ以上頑張れない。その音は高すぎる』というような時が時々あるんだけど、『君なら十分やれるよ。その音を保って』という風に言うんだ。先生は分かっているんだ」。笑いながら、レイシャウンは最終的な結果を認めた。「最終的に声が出るようになるまで、僕は声の弱点すべてを克服し、そしてやり遂げたんだ」。

学習者の目標に基づいて、レイシャウンのコーチのような先生は、何が機能し、何が機能しないかについての具体的な情報を提供する。進行状況を採点したり等級づけたりするのではなく、生徒ができる事柄に注意を向け、進歩するために必要な事柄を指さすのだ。

例えば、10学年の数学の授業で、ガーリンが二次方程式を逆のグラフで表している間違いをしたとき、彼女の先生は、より深い数学的概念に関する新たな発見に彼女を導いた。「半分間違っ

とで、私たちは、まだ分かっていなかったところを学ぶことができるようになったのよ。かなりおもしろいわ」、とガーリンは語った。

スポーツのコーチが学習を強化するために練習試合や公式試合をするように、教師も小テストや期末試験を利用する。「先生はテストを復習し、私たちが間違っていたところを全部確認するのよ」と、9年生のウェジーナは説明する。「でも先生は、私たちに正しい答えを教えることはないのよ。私たちは間違っていたところを、自分自身で訂正しなきゃならないの。先生は私たちを助ける例題とかそんなものをもっているの。私は自分で間違っていたところに気づけるので、実際に役立つのだと思う。でも、もし先生が『これは間違っている』とか『このようにしなさい』とか言ったとすれば、私たちの助けには全然ならないと思うわ」。

条件6：知識はそれを使うためにある

たいていの教師ならすぐに分かるだろうが、私たちが面白いと分かっているものであったとしても、誰か他の人にそれを教えるとなると、話は別になる。生徒が、彼らの知っていることを他の人に提示するか説明しなければならぬとき、大きな一歩を踏み出す機会になる。それがプレゼンテーションであろうが、何らかのパフォーマンスであろうが、または教授であろうが関わりなく、彼らは、知っていることを使うためには、強力な社会的コンテキストの中で、自分自身の理解を統合し、明確化する必要があることを学ぶ。

例えば、生徒は毎日の教室内での活動で、一緒に宿題の問題を解くことで他の人を教えることができる。教師も同様に必要な助けをするために待機していることを指摘しながら、ウィルソンは、「分かった人は分からなかった人たちを教えることができる」と語る。多くの生徒は、多くの場合小グループでの作業が、互いに理解し合えるのに役立つと述べた。サラは歴史の授業での模擬裁判について説明する際、「それはチームの力だった」と述べた。「みんな自分の分は自分でしなきゃならないけど、もし誰かが遅れているのなら、ちょっと助けてあげることができるわ」。

教師の中には、同級生や年下の生徒に学んだことを教えるように求める人もいる。このような状況では、ポイントに焦点をあて、それに注意を集中することが必要になる。学習者は、もはや単なる情報の受け手ではなく、より重要なこととして、会話を介して学習している。そのような機会は、感情面で満たされる（「私は私がつけている知識について友人に誇示できる」）だけでなく、生徒は自分以外の人に質問するために材料を整理したり説明したりする必要に迫られる。「紙の上では正しく見えるものが、他の人に説明すると正しくないことが分かるので、私は自分の間違いを自分で気づくことができる」と、ある生徒は振り返る。他の人に教えるとは、「自分が教えたことをすべて再び自分で考えることだ」と別の生徒も語った。

「学校で学んだ事柄を日常生活に適応しようとするとき、例えば、友達との会話の中に学んだ語彙を使う場合、それはもう本当に何かを学び取ったということなんだ」と15歳のカイルは言った。彼は健康の授業で栄養について学んだ最新の内容を、友人や家族に話すことが特に気に入っている。「それは僕が先生に書いてみせるための情報じゃなくて、僕の生活に関わる情報なんだ」と彼は語った。

条件7：それについて思い返す

次へと移動するのに急いでいる場合、教師は生徒に作業を振り返らせる機会を提供することを忘れて、結論だけを言うてしまうことがある。彼らにとって何が困難であったのか、どのようにこれらの課題を克服したのか。今回は違ったやり方で行うだろうか。彼らはどのようにして成長したのか、を考える必要がある。「教科のなかで分からない事があったり、何かを行うことができなかつたりするときがあるってことは、十分に認めなければならないことだ」と14歳のグリフィンは語った。「でも、自分が心地よくできると思う範囲が広がったときに、最も成長できるんだ」。

「僕は鏡で自分を見ていて、自分が誰なのか分らなかつたんだ」と16歳のルイスは語った。「僕は自分がどんな特質を持っているのか、何を目指してもがいているのか、僕の何が良くて、何が悪いのか、を知らなかつた」。彼の学校において、生徒たちに年に3回、その進捗状況を振り返り、そして報告するように、また改善のために独自の目標を設定するようにしたことで変化は起こった。ルイスは自分が個人的に進歩できたことに関して「勇気とは、それが難しくてもそれを行いつけることを意味するんだ」と結論づけた。「そして僕は基本的にそういう人間なんだと、この学校では知られているんだ。僕は誰もが取るわけではない難しい科目でも履修するんだ」。

間違いを犯してしまった後に、16歳のウィルソンは心の中の自分自身の声を聞く。「『ウィルソン、それを行うのは正しいことではないので、それをするな。お前はもっとよいことを行うことができる』と。自分自身で『それはよくないことだった』と批評しているように感じるんだ。他の人も同じように考えるだろうってことは分かっているけど、彼らは僕に何も言わない。もし僕に教えてくれるなら、僕は感謝するよ。しかし、僕自身でそうするのさ」。

学習者が振り返りを行うとき、彼らの経験は、より多くの意味をもち始める。彼らは既知のものに新しく学んだ事柄を結びつけ、自分の信念や意見を再評価し始める。彼らは、特定の分野に貢献してきた他の人のコミュニティ内に自分自身を置くことができる。彼らは、自らが達成したものははっきりと理解し、おそらくそれを適用するための新しい方法を考える。自分が継続的に発達してきているというストーリーを物語ることで、彼らはまた、自分自身と自分の仕事も評価しているのだ。

12年生のアマンダは、「いろんなことにびっくりしている」ことを認めて、「私は新しいことを学んでいるし、進歩している自分についても学んでいるわ」と言う。教師はアマンダが努力家だと賞賛しているが、彼女自身は、全然そんなことないと思っている。彼女の可能性を彼女に承服させたのは、彼女自身の振りかえりだった。「私ができる最善のことは、できることにすべての努力を傾け、私になりたい道を進むことだと、私は学び始めているの」と、彼女は語った。

条件8：次のステップを計画する

生徒は計画をたてることを、最大の課題の一つであると認めることがよくある。「学校から持ち帰ってくる最も重要なことは、組織することであり、それは僕が本当に苦手なものなんだ」と16歳のマックスは語った。「仕事で何かをするのを忘れたら、おそらくすぐクビになる」。

一般的に、振りかえりのある議論は、それには個人的な目標についての会話も含まれるが、人が将来を見通し、新しい可能性を想像し、それに応じて計画することを学習する重要な拠点を提供する。

15歳のアマデオは第9学年のときを振り返り、「最初は、たくさんの時間があっただけど、僕はのんびりしていて何もしようとしなかったし、怠惰だった」と語った。しかし、彼の視野に大学が入るようになると、彼は大切にしている課外活動と他の仕事とのバランスを取る必要があることに気づいた。「僕がお母さんを手伝うために、高齢者施設に行くことにした」と彼は言った。「僕の時間を優先することは最も重要なことです」。

11年生のケネスは後に「学校にあまり通っていなかった」ことを告白した。「僕は家に帰っても宿題もしない。僕は好きなことをしていた。でもこれからはなんとかやってみようと思う。学校やその後の進路が分かったんだ」。

以下は、高校卒業後何をするのか、そのためにどんな計画をたてるのかに関して自分の考えを整理するために、彼の旧友と交わした会話から取られている。「君は大学に行って、ひとかどの人物になるつもりだろう」と友人から言われたことをケネスは思い出した。「それなら君が情熱を持っているものに従わなければならない」。その年の終わりまでに、ケネスは高校での必要な科目を履修する、より組織的な方法を探っていた。宿題をさぼる代わりに、それを現実の望ましい結果をもたらしてくれる小さなステップと見るようになった。「OK、僕はこれを成し遂げる必要がある。僕がする必要があることを優先させる必要があるんだ」と彼は語った。

多くの学校では、卒業要件として、公開で行われる審査委員会の前に、春にプロジェクトの総仕上げのプレゼンテーションをすることを一般的に課している。生徒は卒業プロジェクトを、自分自身で自らの活動をやり遂げられるよう、十分前もって援助を受け、大人の生活のための準備

が整ったことを最高度に示すものとして、プレゼンを扱うことができるようになる。

アリエルは11年生の終わりに、卒業研究の計画について語ったとき、興奮ぎみに言った。「たった1時間で、私は何をするつもりなのか、何になりたいのか、どのようにすればいいのか、何を書き込めばいいのかが分かったの。それは紙の上だけのことじゃなくて、3D絵本のように、芸術や建築、私が住んでいたすべての場所が飛び出してきたの」。溢れ出てくるアイデアやそれを書き留めるのに夢中になって、アリエルは次の授業の始業時間に遅れてしまった。「私ってよくそんなことがあるのよ。次の授業は、まだ終わってないわ」。

生徒が学業面で成功するためには、計画が必要だ。生徒がプロジェクトや他の学習経験を成し遂げ、新しいものに乗出すときに、彼らもっている技能をどのように使えるかを援助することが大切だ。

動機づけの方程式(価値×期待値=動機づけ)を使う

老いも若きも私たちはすべて、学習課題を成功裏に成し遂げる「必須8条件」を必要としている。「価値」に重きを置くものもあれば、「期待値」を膨らませようとするものもある。どちらの条件も必要なものだ。教師たちは、生徒がやる気を出す点でつまずいていたとしても、動機づけの方程式を使うことで生徒の興味・関心や関わりを引き出すのに役に立つと語った。こう自問してみよう。「私は私がやろうとしている事柄に価値づけをしているだろうか」、次には「私はこれで成功すると期待できるだろうか」。八つのチェック項目に「NO」があるなら、それを「YES」に変えよう。

引用文献、注

- 1) 吉本均著『教室の人間学―「教える」ことの知と技術』明治図書、1994年、p.61.
- 2) 佐藤学著『学校の挑戦―学びの共同体を創る』小学館、2006年、p.271.
- 3) 佐藤学著『教師たちの挑戦―授業を創る 学びが変わる』小学館、2003年、p.153.
- 4) 同上、p.154.
- 5) Adler, Mortimer J., *The Paideia Proposal: An Educational Manifesto*, MacMillan Publishing Co., Inc., 1982, p.27.
- 6) Johannes Amos Comenius, *Didactica Magna*, 1632-1638.
- 7) コメニウス著、鈴木秀勇訳『大教授学1』明治図書、1968年、p.207.
- 8) 佐藤学著『教育方法』左右社、2010年 pp.102-103.
- 9) Dewey, John, *Democracy and Education*, The Free Press, A Division of MacMillan Publishing Co., Inc., 1966[1916], pp.144-145.
- 10) Ibid., p.152.
- 11) Cushman, Kathleen, 8 Conditions for Motivated Learning: Schools and teachers can be more intentional about encouraging student motivation., *Phi Delta Kappan*, Phi Delta Kappa, Inc., May 2014, pp.18-22.